

令和7年（2025）6月4日14時　劇研「空」「ピラ朝山」で発表

『鼠経』（ねずみきょう）　大森の民話を朗読用に手をいれました。

朗読・田中和子、加藤正子、洲浜昌三

昔、山に囲まれた小さな村に、一軒の農家がありました。その家にはお婆さんが一人で住んでいました。

ある日のことです。山に日が落ちて暗くなり始めたころ、蓑笠を被り杖をついた一人の山伏の姿をした男が、村の一本道を歩いていました。

しばらくすると立ち止まって、あたりを見回していましたが、お婆さんの家の方へ足早に歩いて行きました。やがて玄関口に立つと、咳払いをして、丁寧に声を掛けました。

「…こんばんは…こんばんは…」

晩御飯の準備をしていたお婆さんは、こんな時間にだれだろう、と思うながら、小走りに玄関の方へ行き、戸を開けました。

「こんばんは…拙者は旅の者でござりまする。あの峠を越えて隣の町へ行くつもりでここまで来ましたが、日が暮れてしまい困っています。どうか今晚一夜、泊めていただけないでしょうか」

お婆さんは、一瞬困った顔をしましたが、ふと、十日前に連れ合いのおじいさんを亡くして朝晩弔っていたことを思い出しました。

「あなた様は、世間を修業をして歩きなさる人なれば、お経を知っておいでましょう」

男は、一瞬息を止め、ゴクンと唾を飲み込みました。山伏の姿をしていましたが、お経などは、全く知らなかったのです。しかし、山伏の姿をして、

「御経は知りません」とは言えません。

「ハハハハハ、仏様にお仕えする修行の身でございます。もちろん、お教は知っていますとも」

お婆さんは、安心して、山伏を部屋へ通し、仏壇の前へ案内しました。

佛壇の前に座った山伏は、どういつて読まうか、と考えました。お教は聞いたことがあるけど、自分で唱えたことはないので、全く分かりません。

仏壇を眺めていると、輪灯が二つあり、蠟燭立ても、花立てもあります。

山伏は、よしよし、これをお経にしようと、考へて唱え始めました。

「りんとうりんとう、そうりんとう、ろうそくたてか　花たてかあゝ」

「りんとうりんとう、そうりんとう、ろうそくたてか　花たてかあゝ」

何度も何度もくり返しました。

そのうちに、仏壇のそばの穴から小さな鼠が二匹、代わる代わる覗きはじめました。そこで、続けて唱え始めました。

「おんちよろちよろあなのぞき、おんちよろちよろあなのぞき」

お婆さんは、ありがたい御経だと思って一心に山伏の言う通りに唱えて習いました。

次の日から、お婆さんは、毎日佛前に参って御経を唱えていました。

そんなる日のことです。お婆さんがいつものように熱心に御経を唱えていると、裏口からこつそりと覆面をした泥棒が忍び込んで来ました。泥棒は、そつと障子の穴から様子を見ていました。

お婆さんはそれも知らずに、一心に唱えました。

「りんとうりんとう、そうりんとう、ろうそくたてか 花たてかあ」

「おんちよろちよろ穴のぞき おんちよろちよろ穴のぞきゝ穴のぞきゝ」
それを聞いた泥棒は、「この婆さん、知らぬふりをしているが、わしがこの障子から覗いたことを知ってるわい。ああ、恐ろしや恐ろしや」と独り言をいって、こっそり裏口を出て帰って行きました。

（大森尋常小学校五、六年 福田姉弟より）

（20250603 朗読用に再度潤色・洲浜）

『馬鹿正直な息子』（「馬鹿の息子」改題）大森の民話

朗読・山本和之、松本領太、松下史子

ある所に、とても正直で素直な息子さんがおりました。

ある日、お母さんが息子さんに頼みました。

「今日はお父さんの命日だけえ、和尚さんと呼んで来てくれんかいの」

「和尚さんいうたら、どがな者かな」

「黒い衣を着とつてだけえ、すぐ分かるはずじゃ」

「そがだかな。そんじゃ行ってくる」

素直な息子さんは、すぐに和尚さんと呼びに出かけました。道を歩いていると、木の枝に烏がとまっていました。息子さんは、それに向って声を掛けました。

「和尚さん、和尚さん。今日は親爺の命日ですからすけえ、おつとめにきと

くれや」

そしたら、烏が「カアカア」と言いましたた。

「和尚さん、かかあの命日ぢやありません。親爺の命日だけえな」

そう言って家に帰り、お母さんに言いました。

「わしが、なんぼ今日は親爺の命日だけえ、おつとめに来とくれや、言うても、カアカア言うだで、かかあぢやありません、親爺だります言やあ、又かあかあ言うてだで、あんまりはがいいけえ、戻ってきた」

「馬鹿、そりや烏だ」

「そがだかな」

素直な息子さんは、また出て行きました。しばらく行くと、駄屋の中に牛の子がいるのが見えました。

「和尚さん和尚さん、あのな、今日は親爺の命日ですからすけえ、おつとめに来とくれや」

しばらくすると、駄屋の中から子牛が顔を出して、「メイメイ（姪）と言いました。息子さんは腹をたてて家に帰り、お母さんに言いました。

「わしが、親爺の命日だけきとくれ言うても、メイメイ言ふだで、

姪ぢやありません、親爺だります、言うたら、また、メイメイ言うだで、あんまりしゃくにさわるで、もどってきた」

「ばか、そりや牛の子だ。そんなら、はあ、お前に行つて貰うてもつまらんけえ、私が和尚さんと呼んで来るけえ、お前は、ここでご飯が煮えよるけえ、これを見とつてくれ」

お母さんは、そう言って、和尚さんと呼びに行きました。

しばらくして、お母さんは和尚さんを呼んで帰りました。そして息子に言いました。

「ごはんがよう煮えたかいのう」

「煮えた事は煮えたが、あんまり、クツクツクツタ（食た）言うもんで、わしゃまだ食つともせんのに何回も、クツクツクツタ言ひやがるけえ、腹がたつて苦土の灰をぶちかけちゃった」

「なんちゆうことをするんかいのう。ご飯はクツクツ煮えるが、食うた、食うた、とは違うだろうがや」

和尚さんには煮たご飯をあげらなくなり、棚に甘粥があつたので、それをげようと思い、息子さんに言いました。

「ほんなら、仕方がない。棚にある甘粥を和尚さんにあげるけえ、お前は、わしが甘粥の飯銅を下ろすけ、しっかりけつう掴んどつてごせよ」

「うん、分かった」

「おい、しっかりつかんどるか」

「はい、はい。しっかり掴んどります」

それを聞いて、お母さんは安心して飯銅を抱えている手を離しました。

すると、飯銅はガターンと床の上に落ち、甘粥もダラダラと流れてしまいました。お母さんも下へこけて、甘粥だらけになってしまいました。

お母さんは、びっくりして大声を出しました。

「なしてこがなことになったんじゃ！飯銅のけつをしっかりと抱えとつてくれ、言うただろうが」

怒ったお母さんが起き上がって息子さんを叱りつけると、息子さんは、し

っかり自分の「けつ」を掴んでいました。

そればつちり。 (20240909 朗読用に潤色洲浜)

(高二女 清水正枝 母四十七才にきく)

註1 お母さんの清水トミさんは五十四才 佐比売村生

幼時近所のお爺さんからきかれたもの

註2 類話 長谷村井沢 いんきよできいた話 三原村

谷川俊太郎詩集より

『ことばあそびうた』より

昭和四十八年 (1973) 41

かつば

朗読・山本和之

かつばかつばらった

かつばらつばかつばらった

とつてちつてた

かつばなつばかつた

かつばなつばいつばかつた

かつてきつてくつた

いるか

朗読・吉川礼子

いるかいるか

いないかいるか

いないいないいるか

いつならいるか

よるならいるか

またきてみるか

いるかないか

いないかいるか

いるいるいるか

いっばいいるか

ねているいるか

ゆめみているか

『』とばあそびうた また『』昭和56年（1981）50

うそつききつつき

朗読・堤浩隆

うそつききつつき

きはつつかない

うそをつきつき

つきつつく

うそつききつつき

つつきつつく

みかづきつくろと
つきつつく

貉（むじな）

（これは田中貢太郎の書いた貉です）

朗読・堤浩隆、山本和之、松本領太

幕末の話である。

某ある商人（あきんど）が深更（よふけ）に赤坂の紀の国坂を通りかった。左は紀州邸の築地堀、右は濠。そして、濠の向うは彦根藩邸の森々しんしたる木立で、深更と言い自分の影法師が怖こわくなるくらいな物淋しさであった。ふと濠傍（ほりば）たの柳の木の下にうずくまっている人影に気づいた。

どうやら若い女のように、悄然（しょうぜん）と袂（たもと）に顔をうずめて泣いているのであった。商人はつきり身投げ女だと思った。驚かさないようにして女の傍（そば）へ寄っていった。

「どうかしたのかい、姉さん。狭い量見（りょうみ）を起しちやいけないよ」

女は顔もあげないでしくしくと泣きつづけた。商人は寄り添って腰をかがめた。

「ね、どうしたんだい。姉さん思案（しあん）にあまることがあるなら、いくらでも力になつてやるよ、わけを言つて見な」

女はますます袂（たもと）へ顔をうずめて泣き入るばかりであった。商人はじれったくなつて女の肩へ手をかけた。

「どうしたのだ、姉さん、人が親切に言ってるのだ、わけを言ったらいいじゃないか」

女はひよいと袂から顔をあげた。それは目も鼻も何もないのつぺら坊であつた。

「わ」

商人は一声叫ぶなり坂を四谷（よつや）の方へ逃げあがつた。あがつたところに夜鷹蕎麦（よたかそば）の灯があつた。商人は韃（ふいご）のような呼吸（いき）と同時にその屋台へ飛びこんだ。

「大変だ、大変だ」

「どうなすったかね」

もやもやと立つ湯気の向うにいる親爺はつまらなさそうに言った。

「どうもこうもありやしねえ、そこで大変な代物に衝（ぶつ）突つかったんだい」

「追剥（おいはぎ）にでもお会いなすったかね、当世珍らしくもねえ話だ」

「馬鹿にするな、追剥ぐらいで江戸っ児が騒ぐかい。妖怪（ばけもの）に会つたんだい、大変な顔をしてやがったのだ」

「へ、大変な顔、どんな大変な顔でござんした」

「それがおめえ、恐ろしいの何のつて、とても一口に言えやしない」

「こんな顔じゃなかったかね」

親爺はぴしやりと額ひたいを一つ打つなり湯気の間から顔を出した。目も鼻も何もないのつぺら坊だつた。

商人は氣を失つた。その頃紀の国坂一帯には貉が数多（たくさん）棲すん

でいて、よく悪戯（いたずら）をしたと言われている。

（小泉八雲の「貉」の冒頭は次のように始まります）

貉 MUJINA 小泉八雲 Lafcadio Hearn 戸川明三訳

東京の、赤坂への道に紀国坂という坂道がある——これは紀伊の国の坂という意である。何故それが紀伊の国の坂と呼ばれているのか、それは私の知らない事である。この坂の一方の側には昔からの深い極わめて広い濠（ほり）があつて、それに添つて高い緑の堤が高く立ち、その上が庭地になっている、——道の他の側には皇居の長い宏大な塀（へい）が長くつづいている。街灯、人力車の時代以前にあつては、その辺は夜暗くなると非常に寂しかった。ためにおそく通る徒歩者は、日没後に、ひとりでこの紀国坂を登るよりは、むしろ幾（いく）哩も回り道をしたものである。

これは皆、その辺をよく歩いた貉のためである。

貉を見た最後の人は、約三十年前に死んだ京橋方面の年とつた商人であつた。当人の語つた話というのはこうである、——

この商人がある晩おそく紀国坂を急いで登って行くと、ただひとり濠（ほり）の縁（えり）ふちに踞（く）かがんで、ひどく泣いている女を見た。身を投げるのではないかと心配して、商人は足をとどめ、自分の力に及ぶだけの助力、もしくは慰藉（げいせき）を与えようとした。女は華奢な上品な人らしく、服装（ふくそう）みなりも綺麗であつたし、それから髪は良家の若い娘のそれのように結ばれていた。——

『お女中』と商人は女に近寄って声をかけた――

『お女中、そんなにお泣きなさるな！……何が困りなのか、私に仰しい。その上でお助けをする道があれば、喜んでお助け申しませう』

（実際、男は自分の云った通りの事をする積りであった。何となれば、この人は非常に深切な人であったから。）しかし女は泣き続けていた――その長い一方の袖を以て商人に顔を隠して。

『お女中』と出来る限りやさしく商人は再び云った――

『どうぞ、どうぞ、私の言葉を聴いて下さい！ここは夜若い御婦人などの居るべき場所ではありません！御頼み申すから、お泣きなさるな！――どうしたら少しでも、お助けをする事が出来るのか、それを云って下さい！』

徐ろに女は起ち上ったが、商人には背中を向けていた。そしてその袖のうしろで呻き咽びつづけていた。商人はその手を軽く女の肩の上に置いて説き立てた――

『お女中！――お女中！――お女中！ 私の言葉をお聴きなさい。ただちよつとでいいから！……お女中！――お女中！……』

するとそのお女中なるものは向きかえった。そしてその袖を下に落し、手で自分の顔を撫でた――見ると目も鼻も口もない――きやツと声をあげて商人は逃げ出した。

一目散に紀国坂をかけ登った。自分の前はすべて真暗で何もない空虚であつた。振り返ってみる勇氣もなくて、ただひた走りに走りつづけた挙句、ようよう遙か遠くに、螢火の光っているように見える提灯を見つけて、その方に向つて行つた。それは道側みちばたに屋台を下していた売り歩く蕎麦屋の

提灯に過ぎない事が解つた。しかしどんな明かりでも、どんな人間の仲間でも、以上のような事に遇つた後には、結構であつた。商人は蕎麦売りの足下に身を投げ倒して声をあげた。

『ああ！――ああ！……ああ！……』

『これ！ これ！』と蕎麦屋はあらあらしく叫んだ

『これ、どうしたんだ？ 誰れかにやられたのか？』

『否いや、――誰れにもやられたのではない』と相手は息を切らしながら云つた――『ただ……ああ！――ああ！……』

『――ただおどかされたのか？』と蕎麦売りはすげなく問うた。

『盗賊どろぼうにか？』

『盗賊どろぼうではない――盗賊どろぼうではない』

とおじけた男は喘ぎながら云つた

『私は見たのだ……女を見たのだ――濠の縁ふちで――その女が私に見せたのだ……ああ！ 何を見せたつて、そりや云えない』……

『へえ！ その見せたものはこんなものだったか？』

と蕎麦屋は自分の顔を撫でながら云つた――それと共に、蕎麦売りの顔は卵のようになった……そして同時に灯火は消えてしまった。